

## 松尾芭蕉

1644(寛永21)年～1694(元禄7)年  
俳人 伊賀上野(三重県)出身  
蕉風俳諧を確立して俳聖と称され、日本各地を旅して紀行文や俳文を残す  
『奥の細道』『野ざらし紀行』など

### ① 奥の細道碑

日和田町安積山(安積山公園) 昭和39年  
「等閑が宅を出て五里斗、椋皮の宿を離れて、あさか山有…」

### ② 芭蕉句碑

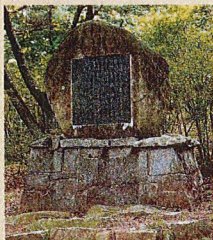
西田町三丁目字清水堂(阿弥陀堂) 昭和2年  
「先たのむ椎の木もあり夏木立」

### ③ 芭蕉句碑

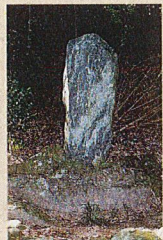
田村町山中字本郷(田村神社) 昭和49年  
「風流のはじめや奥の田植うた」

### ④ 芭蕉句碑

田村町板山神字東(不動尊) 享和  
「さされ蟹あし這のほる清水かな」



①



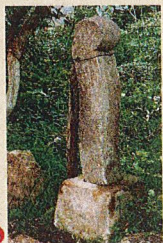
③

## 佐々木露秀

1735(享保20)年～1807(文化4)年  
佐渡屋(旅籠)主人  
郡山の俳人の宗匠格で、俳句結社「安積不孤園社」を結成  
妙音寺観音堂に蟬塚碑を建立(現在は清水台の大慈寺に)  
『蟬塚集』など

### ⑤ 佐々木露秀句碑

中田町海老根字柿ノ口  
「辛し菜や高き屋見たく咲つづく」



⑤

# 郡山文学マップ

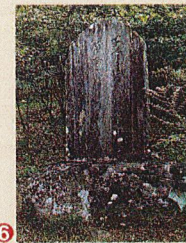
## 4 東部・北部編 —文学碑・文学者ゆかりの地—



## その他の文学碑

### ⑥ 万葉歌碑

日和田町安積山(安積山公園) 大正5年  
「あさか山影さえみゆる山の井の あさき心をわが思わなくに」



⑥

## 文学ゆかりの地

### ア 安積山

万葉の時代から歌枕として和歌に登場

### イ 安積沼跡

安積山と並ぶ歌枕の地  
芭蕉はこのあたりで花かつみを探す  
蛇骨地蔵の伝説が残る

### ウ 蛇骨地蔵堂

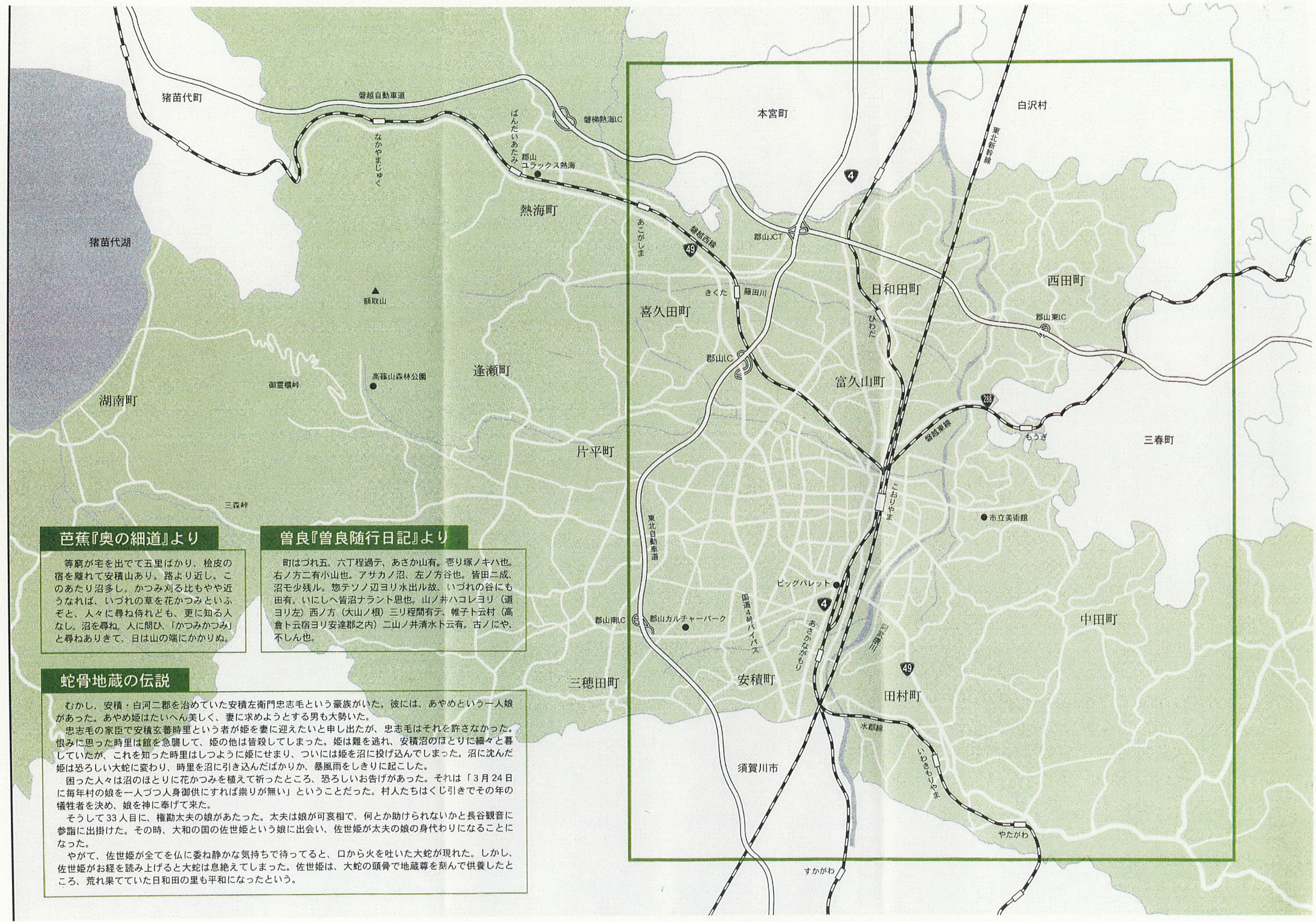
西方寺内にある市重要文化財  
室内には佐世姫の木像がある

### エ 阿武隈川(小泉鉄橋)

久米正雄『阿武隈心中』1916(大正5)年  
工業による近代化の矛盾を描いた戯曲

### オ 田村町

諏訪三朗『大地の朝』1940(昭和15)年  
農村改革に燃える貧しい青年と地主の娘との恋愛小説



**芭蕉『奥の細道』より**

等翁が宅を出て五里ばかり、袷皮の宿を離れて安積山あり。路より近し。このあたり沼多し。かつみ刈る比もやや近うなれば、いづれの草を花かつみといふぞと、人々に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼を尋ね、人に問ひ、「かつみかつみ」と尋ねありきて、日は山の端にかかりぬ。

**曾良『曾良随行日記』より**

町はづれ五、六丁程過テ、あさか山有。壱り塚ノキハ也。右ノ方ニ有小山也。アサカノ沼、左ノ方谷也。皆田ニ成。沼モ少残ル。惣テソノ辺ヨリ水出ル故、いづれの谷にも田有。いにしへ皆沼ナラント思也。山ノ井ハコレヨリ(道ヨリ左)西ノ方(大山ノ根)三リ程間有テ、帷子ト云村(高倉ト云宿ヨリ安達郡之内)二山ノ井清水ト云有。古ノにや、不しん也。

**蛇骨地藏の伝説**

むかし、安積・白河二郡を治めていた安積左衛門忠志毛という豪族がいた。彼には、あやめという一人娘があった。あやめはたいへん美しく、妻に求めようとする男も大勢いた。

忠志毛の家臣で安積安番時里という者が姫を妻に迎えたいと申し出たが、忠志毛はそれを許さなかった。恨みに思った時里は館を急襲して、姫の他は皆殺してしまった。姫は難を逃れ、安積沼のほとりに細々と暮らしていたが、これを知った時里はしつように姫にせまり、ついには姫を沼に投げ込んでしまった。沼に沈んだ姫は恐ろしい大蛇に変わり、時里を沼に引き込んだばかりか、暴風雨をしきりに起こした。

困った人々は沼のほとりに花かつみを植えて祈ったところ、恐ろしいお告げがあった。それは「3月24日に毎年村の娘を一人づつ人身御供にすれば祟りが無い」ということだった。村人たちはくじ引きでその年の犠牲者を決め、娘を神に奉げて来た。

そうして33人目に、権助太夫の娘があつた。太夫は娘が可哀相で、何とか助けられないかと長谷観音に参詣に出掛けた。その時、大和の国の佐世姫という娘に出会い、佐世姫が太夫の娘の身代わりになることになった。

やがて、佐世姫が全てを仏に委ね静かな気持ちで待っていると、口から火を吐いた大蛇が現れた。しかし、佐世姫がお経を読み上げると大蛇は息絶えてしまった。佐世姫は、大蛇の頭骨で地藏尊を刻んで供養したところ、荒れ果てていた日和田の里も平和になったという。